



2018.8  
vol.211



## グローバルクラス開設について

学校長 飯山 等

質問:宇宙人っていますか?あなたなら何と答えますか? 詩人・谷川俊太郎さんはこんなふうに答えています。「いますよ。あなたも宇宙人です」(「谷川俊太郎の質問箱」(ほぼ日出版))。つい自分の外にそれを考えてしまう、それとまったく逆の内観の眼でこの問いを受けとめる。そのようなところでグローバルを考えたい。「地球(the globe)上に暮らす人々は皆一つの船に乗った仲間である」、これが「グローバルglobal」の意味なのだと、シンプルに受けとめたいと思います。

大谷がここに新たに開く学びのかたちは、大谷が時代に相応しくあるために外から新しく付け加えるものではなく、時代が大谷に求める、大谷のここでの本来性の発揮として開く学びです。親鸞聖人が開かれ、自ら深く生きてくださった人と人との関係性を、後の蓮如上人は「御同朋御同行とこそ、かしづきて」と受けとめてくださり、このことの肝要を、近代の真宗学者・曾我量深氏は、《御》の一字にあると教えていただきました。親鸞聖人はお手紙の中でも「自力の御はからいにては、真実の報土へ生まるべからざるなり」と仰っています。真実という高いところから「はからい」を否定・排除するのではなく、「御はからい」と、かけがえのない人様(石牟礼道子さんの確かめ)の営為として、尊び、向き合っておられます。同朋・同行という開けが、《御》のところで開かれるかどうか。《御》のところを開く、真に尊び合う、respectの開かれとしてなされる、そのようなグローバルでこそありたいと思います。

「respec」とは<re- =振り返って>+<spect=見る>と辞書にあります。辞書には類語として、「admire, regard, look up to」などを載せ、特に「respect」について、「たとえ同意できないとしても、その

質の良さをすばらしいと認め敬意を払うこと、また、大切にされるべき意見・願望・権利などを重んじること」と説明されています。異なりを受けられ難い、同意できない自分と闘い、もう一度しっかりと向き合う。そこに生まれる敬意、大切にされるべき人様。

しかし、世界を距てる垣根を低くするはずのグローバル化が、「私」と「彼」、「われら」と「かれら」のように、分断する力としてはたらく。せっかく異質なものに出会いながら、交わるより先にそれを拒み、否定することによってしか自分を確立できないのだとすれば、「私」とは、「われら」とは、なんと哀しくさびしいものではないでしょうか。「自分ファースト」になってしまう、そんな危うさを感じる今だからこそ、大谷はグローバルクラスを開設します。

幸いカリフォルニア大学デービス校・国際教育センター責任者である藤田斉之先生とご縁を得て、話し合いを重ねるなかで、大谷の教育への深い共感を持っていただき、スーパーアドバイザーとして力になってくださることになり、さらに先生のおられるUCDavis校での研修を行うことになりました。私たちにとって大きな勇気です。

「グローバル教育にはもちろん世界共通語の一つである英語力養成を組み込むのは理に当たっていますが、「グローバル教育」=「英語教育」ではないということです。では、何が次世代を担う10代の中高生に必要な教育なのかというと、その答えは「人間力を高める」、これに尽きると思います。世界中で起こっている出来事を如何に自分と関わりを持って考え行動出来るかというマインド・セットを持つ事が何よりも大切です。私は今の時代だからこそ、「人としてどうあるべきか」という本質を教育の根底理念に掲げる大谷高校のグローバルクラスに共感します」(藤田先生がグローバルクラスリーフレットのために寄せていただいたメッセージより)。